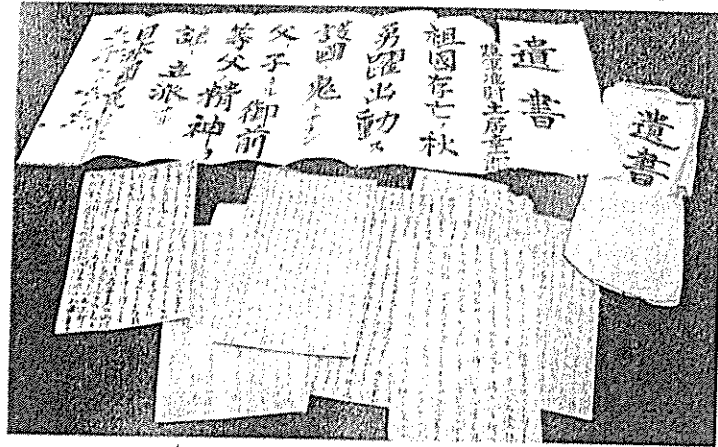


県遺族会に寄贈された戦没者の遺書やはがき



戦没者遺品散逸防げ

県遺族会 寄贈呼び掛け

【香長】終戦から69年を経て戦没者遺族の高齢化が進む中、県遺族会（中内桂郎会長）が「遺品が散逸するのではないか」と危機感を強めている。遺品を含む戦時資料の寄贈を会員に呼び掛けるとともに、県立歴史民俗資料館（南門市岡豊町）からは一部を保管・展示する協力を取り付けた。関係者は「家庭には多くの遺品・資料が残っているはず。戦争の悲惨さを次世代に伝えるため、ぜひ寄贈を」と訴えている。（山本 仁）

歴史館で保存へ「次世代に伝えたい」

同会によると、会員である遺児の多くが75歳以上を迎えている。遺品の存在は認識していても、内容や保管場所が正確に伝わらず、戦没者の妻の死去で所在が分からなくなる例もあるという。

このため大石綾子（よしこ）副会長（69）＝香美市香北町＝らが「戦没者の孫、ひ孫の世代では『紛失』がさらに増える恐れがある。可能な限り集めないと手遅れになる」と憂慮。文化財保管のノウハウを持つ同館に受け入れを打診し、応諾を得た。

同館は集まった遺品・資料の保存状態などを調べた上で公開可能なものを受け入れるという。それ以外の品は高知市吸江の同会事務局での保管を検討している。

同会は昨年11月から遺品収集に乗りだし、会員約5700人に会報などを通して呼び掛けた。これまでに香南市や香美市の5人から遺書や軍服など計10点以上が寄せられた。

大石副会長も終戦前夜に旧満州で戦死した父、土居幸一郎さんの遺書を寄贈。「祖国存亡ノ秋 勇躍出動ス 護国ノ鬼トナラン」で始まり、父の精神を継いで「立派ナル日本国民トナルベシ」と訴えている。

大石副会長は「先の大戦が何だったのか、事実を後世に伝えて検証しなければならぬ」と話している。海軍軍人だった父、五郎さんをフィリピン近海で亡くした弘田忠士副会長（77）＝香南市野市町＝も「思いがこもった遺品を、公の施設で生かしてほしい」と話している。

問い合わせは、県遺族会（088・8884・8700）へ。